

若手技術者諸君、夢を持って!!! 技術を持って!!!

あの忌まわしい東日本大震災の発生から1年が経過した。早いとも遅いとも感じられる1年であったが、われわれに「災害は忘れた頃にやって来る」ということよりも「災害は必ずやって来る」ということを教えられた1年であった。被災地は関係者の方々の昼夜を問わない尽力のお陰で復旧がかなり進んだとは言え、未曾有の震災であったため、ハード面、ソフト面ともに復興そして再生が緒に就いたばかりと言っても過言ではない。しかし、「国道〇〇号が〇〇日ぶりに再開」とか「JR〇〇線が復旧」という社会基盤や各種ライフラインの復旧再開の明るい報道に近隣住民のみならず全国民が歓喜した。

このような報道を見聞きすると、われわれの先輩技術者たちが如何に大きな成果を残したかを実感する。平時はもちろんのこと、地震や水害などの影響で道路が分断された場合には、復旧作業や救援物資の搬入が滞り、被災された住民の生活は大変な不便を強いられることになる。このようなことはテレビなどで、たびたび報道され、多くの人々が社会基盤の大切さを無意識のうちに改めて認識している。しかし、残念ながら、近年、諸般の事情により建設投資額は減少傾向にあり、そのことが将来、わが国の国力低下につながるのではないかと危惧している。また、昨今の建設事業に

対する社会からの風評により、建設業界のみならず、建設に携わる技術者、特に若手技術者の多くが、現状に満足せず、さらには将来に対して夢や希望を持つことができないでいるのではないかと心配している。この復旧・復興事業実施が社会基盤そして各種ライフラインの社会的意義やその効果などについて改めて考える契機となり、若手技術者が従来の慣習に囚われることなく、自分の仕事に誇りを持つとともに、仕事を通じて、夢や希望を抱き、その実現に向かって努力できる環境が整えられれば嬉しいことである。

一方で、自分の仕事に誇りを持つためには、まず、自身の資質向上が必要である。近年、設計業務はコンサルタントに委託し、施工は建設会社に請負わせているものの、技術系職員は、地元対応や積算業務などに追われて時間的余裕が少なく、建設現場に行く機会が減っている。この際、技術者の原点は現場であるとの認識に立ち戻って、任務に当たるべきである。そのためには、業務を抜本的に見直し、発注者が自ら実施すべきものと、アウトソーシングすべきものを見直すことから始めると良い。次に、仕事内容について疑問を持ち、自身で解決すべきである。そのためには、まずは自分で経験を積むことが大切である。さらには、公共事業においては仕様発注の名のもとに、全国

金沢工業大学 基礎教育部 修学基礎教育課程
教授

なか むら いっ ぺい
中 村 一 平



一律の基準で構造物は作られ、それなりの成果を挙げていることは事実であるが、コスト縮減の観点から身近な構造物については、地域特性や必要とする性能も考慮に入れた性能発注を推進すべきである。そのためには、発注者には優劣を判定する能力が求められる。いずれにしろ、今後、ますます、発注者にも施工者にも、より一層高度な技術力が求められることは間違いない。その技術力を証明する手段として、資格は強力かつ客観的な評価判定手段となる。そのため、民間会社はもちろんのこと、多くの自治体でも職員の資格取得を物心両面で支援している。職場で誰かが資格を取得すると、そのことが周りの人に良い刺激を与え、周りの人達も資格取得に挑戦し、活気溢れた職場環境が構築された事例がある。

さらに、組織が有する技術やその成果を社会に対して広く広報することが世間から建設事業が認知されるためには重要である。上述のとおり、社会基盤は人々の安全・安心、そして利便性の向上に大きく貢献しているにもかかわらず、国民から十分理解されていないのは、われわれ、社会基盤の整備に携わる者が、国民にその効果を分かり易く説明することに積極的に関与しなかったことが一因ではないかと考える。客観的根拠に基づいた社会基盤整備のあり方について国民的議論が起

こることは、歓迎すべきことである。

今後、財政状況は、さらに厳しくなることと思われるが、国民生活に直結した各種ライフラインなどの社会基盤の使命は、いつの時代も変わることはない。高度成長期に建設された大量の社会基盤を良好な状態で末永く利用するために、今後は改良や維持修繕の仕事で忙しくなることは確実である。人間社会と同様、社会基盤も高齢化が進んでいるために維持管理業務は国民から負託された大切な仕事になる。

また、日本国内の建設事業は減少しているものの、海外に目を向けると、途上国を中心に社会基盤や各種ライフラインの新設および維持管理などの莫大な仕事が待ち受けている。途上国ではその整備効果は大きく、住民からは大きな期待を持って、その完成が待たれている。このような仕事に携われることは技術者として最高の荣誉であり、喜びでもあり、若手技術者には是非、挑戦してほしい分野である。

以上のことを自覚し、自信や夢・希望そして矜持を保ちつつ、社会基盤整備に関する国民からの要望を的確に把握し、それに即した事業を誠実にを行い、社会貢献を果たすことで、技術者は社会や国民からさらなる信頼を得られるものと確信する。
「がんばろう日本!!! がんばれ若者!!!」